

でこんなにたくさんのカボチャが生えるなんて、悪いことがやってきたのではないかと不安になりました。二人は畑からカボチャを刈り取り、いくつかを干してシチューを作ってみました。

ようやく全部のカボチャを採り終わるころ、並外れて大きなカボチャを見つけました。その大きなカボチャを切ろうとしたそのとき、カボチャが

泣き出しました。カボチャは「切らないでください! お二人は僕の両親

なんです」と言うのです。

に入りました。

カボチャがあまりに大きいので、夫婦はカボチャの中に誰かが入っているのかと思いました。しかし、すぐにこれは自分のことを息子だという「しゃべるカボチャ」だとわかりました。お爺さんはカボチャに「わたしたちは本当の人間の子供がほしいのであって、しゃべるカボチャはほしくないんだよ」と話しました。カボチャは、「ぼくはほかの子供と同じことができる

と言って、歌い踊り始めたのです。 夫婦は、今までにないほど幸せを感じ、遂に自分たちの願いが叶ったのだと喜びました。歳をとった夫婦にとって、その後のカボチャはとても役に立つ子供でした。

の中にカボチャと結婚したいなんていう女性がいるわけがないと心配しま

した。カボチャは「ぼくは王女様と結婚するから大丈夫、お城に行って王

カボチャは結婚したいと言い出しました。お婆さんは、この世

からがっかりしないでください」と答えてきました。「歌も歌えるし、踊り

も踊れますよ。おじいさんとおばあさんのために働くこともできるんです。」

様にお嬢さんをくださいとお願いするんだ。」と答えました。お婆さんは王 女様がカボチャと結婚するわけがないのだから、他の人を探すように諭し ましたが、カボチャの気持ちは変わりませんでした。 カボチャは自分の望みを果たすために動き出しました。いくつかの川や谷 を渡り、さらに丘を越え、ようやくお城にたどり着きました。お城はとて も大きな壁に囲まれていて、守衛がいる正門以外入る所はありません。カ

ボチャは持ってきた袋から唐辛子を取り出し、守衛たちに吹き付けてお城

しまい、テーブルの上にあった花瓶が落ちてしまいました。王様はその音

に気づき、王女様はカボチャがテーブルの下に隠れているのを見つけまし

た。
カボチャはテーブルから出てきて王様に挨拶し、堂々と王女の一人をお嫁さんに欲しいと申し出ました。王様はカボチャがどうやってお城の中に入れたのか、不思議に思いました。女王様は、カボチャは頭がおかしくなっ

ていると思い、お婿さんとしてふさわしくないと言いました。王様は、娘

がよいというのであれば結婚を認めようと言いました。

き、お別れの言葉を告げて新居に向かいました。

言いました。いちばん下の娘は「神様がそうすることを私に望むのなら、 それに従いましょう」と言いました。 結婚式で王様はカボチャに娘を大事にしてほしいこと、できるだけ多く自 分たちに会いに来てほしいことを伝えました。カボチャと王女様はうなず

るとても暑い日、王女様はひどく喉が渇いていました。二人は偶然マ

ンゴーの実がなる樹の前を通りがかりました。マンゴーの実は手の届かな

いところになっていて、王女様は誰か取ってくれないかしらと思っていま

した。「僕がとってくるよ」とカボチャは言って、マンゴーの樹に駆けより、

王様には三人の娘がいて、長女と次女はカボチャと結婚するのはいやだと

短い手と足を使って全力で樹に登り始めました。マンゴーの実をつかみかけたその時、カボチャは滑って樹から落ちてしまい、その衝撃で割れてしまいました。それを見た王女様は悲鳴をあげました。



舞い上がった土埃が落ち着くと、そこには王子様のようなハンサムな青年が立っているではありませんか。彼は自分があのカボチャであると王女様に語りかけました。カボチャは結婚するのを魔女に邪魔されていた、遠い国からやってきた王子様だったのです。

カボチャの王子と王女様は年老いた両親の元に戻り、いつまでも幸せに暮らしたとのことです。

方(表)(表)(多)(新)